

【ポスターセッション】

## スーパーバイザー養成プログラムの開発と評価(中間報告)

ー福祉現場でのスーパービジョン普及をめざしてー

○立命館大学 岡田まり(1740),

片岡靖子(久留米大学・3183), 野村豊子(日本福祉大学大学院・4514)

潮谷恵美(十文字学園女子大学・2079), 潮谷有二(長崎純心大学・2675)

キーワード: スーパービジョン、スーパーバイザー、プログラム開発

## 1. 研究目的

社会福祉士が高い専門性をもって良質のサービス提供を行うためには、実務経験を積みながらスーパービジョンを受けることが必要である。スーパービジョンは、組織の方針にそって質量ともに最良のサービスを利用者に提供することを目指して、スーパーバイザーがスーパーバイザーの職務遂行を監督、調整、強化、評価することであり、管理的、教育的、支持的な機能を有している(Kadushin & Harkness, 2014)。スーパービジョンによって、スーパーバイザーは効果的にサービスを提供できるようになり、サービス利用者は良質のサービスを利用でき、組織は業務量や業務実態を把握して対応することでサービスの水準を維持することができるとされている(Tsui, 2005)。スーパービジョンが普及した欧米では多くの評価研究が行われており、27論文(総計サンプル数 10867)を対象としたメタ分析では、スーパービジョンがあるほど有益な実践結果が増え、有害な結果が減少することが明らかになっている(Barak, Travis, & Pyun, 2009)。

わが国でも認定社会福祉士制度においてスーパービジョンは不可欠なものとなっているが、福祉現場ではスーパービジョンが定着しているとは言えない状況にある。日本社会福祉士会(2012)の会員を対象とした調査では、資格取得後スーパービジョンを受けた経験がある者は50%、定期的に受けている者は5.3%にすぎない。スーパービジョンを受けたことがない理由としては、スーパーバイザーの不在や上司・職場の理解不足などが挙げられている。そのため、スーパービジョンについて理解が深まり実施可能となるように環境整備を行うとともに、スーパーバイザーを養成し支えることが喫緊の課題である。

以上により、本研究では、領域・分野およびレベルを超えてスーパーバイザーに必要とされる専門性を獲得するためのスーパーバイザー養成プログラムの開発をめざしており、今回はその中間報告を行う。このようなプログラムができれば、福祉サービスの向上と福祉人材の育成・確保に寄与することができると思われる。

## 2. 研究の視点および方法

根拠に基づく実践を重視し、実証的に評価を行う。2015年度には、まず先行研究に基づいてスーパーバイザー養成プログラム案と評価尺度案(自己評価チェックリスト)を作成した。そして、スーパービジョンについて見識・経験ともに豊かな研究者に、そのプログラムを受講してもらい、フォーカスグループインタビューと自己評価チェックリストによりプログラム改善のため

のデータを収集した。これを2年間で3回実施し、計19名の研究者の協力を得て、プログラム内容と評価尺度を修正した。さらに、2017年3月には18名の社会福祉士を対象にパイロット・テストを実施し、その評価にもとづいてプログラム全体を再構成した。2017年度からの2年間には、福祉現場でスーパーバイザーを務めている、あるいは務める可能性のある社会福祉士に協力を依頼してプログラム評価を行う予定である。2017年度と2018年度の両年度に参加協力者が多く得られれば、2018年度参加希望者をコントロール群として準実験計画法によりプログラムの効果測定を行う。参加者が少ない場合はタイムシリーズでプログラム受講前後の比較を行うことでプログラムの効果を評価する。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守して行った。参加者には本研究の目的・意義、方法、個人情報保護、本研究への参加の任意性と随時中断できること、協力の有無や中断によって不利益を被ることはないこと、得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、プログラム実施・データ収集・成果の公表においては参加者の人権とプライバシーを尊重すること等について文書及び口頭で説明し、同意書を得た上で実施した。今後も同様の配慮を行う。

### 4. 研究結果

先行研究とアクションリサーチにより、事前研修(1日)と模擬スーパービジョン(1日)から成るスーパーバイザー養成プログラムができた。事前研修は、スーパービジョンについての講義とロールプレイを含む演習から構成されており、スーパーバイザーが行う10項目についての認知行動スキルの獲得をめざすものとなっている。模擬スーパービジョンでは、3人一組となって、スーパーバイザー、スーパーバイジー、観察者の役割を順に体験する。1セッション45分程度で、スーパーバイジー役が事前課題として用意する事例を活用してスーパーバイザーはスーパービジョンを行い、観察役はその様子を観察しながら、観察ポイントを明示した観察シートに記入する。スーパービジョンがすべて終了した後で振り返りを行い、アクションプランを練る。参加者からの評価では、スーパーバイザーが行う10項目や観察の有用性が挙げられている。また、自己評価チェックリストについては、一定の信頼性が認められ、評価尺度として活用可能であることが示唆された。

### 5. 考察

本研究では、先行研究からの知見だけでなく、参加者や研究班メンバーの経験知・実践知を集約してプログラム開発に役立ててきた。その結果、実情に即したプログラムとなっている。今後、実証的にプログラムの効果を評価することで、より効果的で実質的なプログラムになるよう改善していきたい。

なお、本研究は科学研究費助成事業基盤研究(B)(代表：岡田まり)「社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価」(平成27年度～平成30年度)の一部である。ご協力いただいた方々に心より感謝いたします